

資料

子どものタイプA行動の表出に及ぼす下位特性と脅威的状況の効果

黒田裕子*

THE EFFECTS OF COMPONENTS AND THREATENING SITUATIONS
ON A MANIFESTATION OF TYPE A BEHAVIOR IN CHILDREN

Yuko KURODA

The present investigation examined the effects of components and threatening situations on a manifestation of Type A behavior in children. Two hundred and fifty-six children (grade3-4) were classified by MYTH's two sub-scale scores into four types composed of high or low competitiveness by high or low impatience-aggressiveness. All subjects were assigned to one of four task situations, labelled as threatening by competition, threatening by time pressure, no threatening of control, or relaxing. Type A behavior was assessed by Stroop Color Word Test performance. Results showed that competitiveness was more related to a manifestation of Type A behavior than impatience-aggressiveness, and that childrens' manifestation of Type A behavior increased in threatening situations more than in non-threatening control or relaxing conditions.

Key words : type a behavior, children, components, threatening situations.

問 題

タイプA行動パターンは、“より多くをより少ない時間でやり遂げようとする奮闘に巻きこまれている者に見られる行為-情動複合体”(Friedman & Rosenman, 1974)であり、その行動は、主として競争性・時間切迫性・攻撃性などの下位特性で特徴付けられる(Price, 1982)。

タイプA行動パターンは、心筋梗塞などの冠状動脈性心臓疾患(coronary heart disease)の独立危険因子であるとされており、日本でもそのことは確認されている(大枝・保坂・田川・杉田・日野原・五島, 1984)。

さて、山崎・菊野(1990)はタイプA行動パターンの最終的な研究課題としてその予防および矯正を挙げているが、そのためには、タイプA行動が形成される心

理的メカニズムを明らかにすることが重要であると考えられる。それに関して Matthews (1981) は、タイプA行動が出現する年齢とそれが行動特性として固定する年齢を同定し、その間の年齢範囲を研究対象とすべきであると指摘している。これまでの研究から、タイプA行動はすでに就学前期に出現し(Lundberg, 1983; Vega-Lahr & Field, 1986; 山崎・菊野, 1990)、小学生では1年間の時間推移を経てもほぼその行動傾向は固定していることが認められている(Matthews & Avis, 1983; Weidner, McLellarn, Sexton, Istvan, & Connor, 1986)。しかしながら、さらに長期にわたって追跡研究した結果、成人に至るまで固定しているのは、思春期以降のタイプA特性であることも指摘されている(Bergman & Magnusson, 1986; Steinberg, 1986)。したがって、タイプA行動が形成される心理学的メカニズムを解明するためには、就学以降から思春期前期の年齢範囲の子どもを研究対象とすることがとりわけ必要とされる。

子どものタイプA行動パターンの評定法として

* お茶の水女子大学 (Ochanomizu University)

とも一般的に用いられている評定法は、Matthews Youth Test for Health—以下MYTHと略す—(Matthews & Anglo, 1980)である。MYTHは、教師の評定による17項目5件法の質問紙で、競争性 (competitiveness) と焦燥—攻撃性 (impatience-aggression) の2下位尺度で構成される。近年日本でもMYTHの日本語版が作成され(菊野・山崎, 1988), 原版とほぼ同様に競争性と焦燥—攻撃性の2因子を得ている。ちなみに、MYTHではほぼ一貫して得点の有意な性差(男子>女子)が認められている(Corrigan & Moskowitz, 1983; 菊野・山崎, 1988; Kirmil-Gray, Eagleston, Thorlesen, Heft, Arnow, & Bracke, 1987; Lundberg, 1983; Matthews & Anglo, 1980)

MYTHで得られる下位尺度が競争性と焦燥—攻撃性であることは先に述べたが、これらはそれぞれ成人のタイプA行動の下位特性としてもっとも一般的に同定されているものの1つである(Price, 1982)。Matthews (1982)は、下位特性の分析をとおしてタイプA行動の核となる心理的要因を同定する試みの必要性を指摘している。また、Price(1982)は、競争性と攻撃性などのまったく概念の異なる下位特性がどのように互いに結びつくのかという問題を解明する必要性を指摘している。これに関して、攻撃性は、タイプA行動の表出を規定する要因というよりはむしろ、行動表出の結果引き起こされる情動反応と考えたほうがよいのではないかという示唆もある(Strube, 1987)。もしも、Strubeの示唆するように、攻撃性が、タイプA的行動表出に伴う情動反応であるならば、それは、タイプA行動の形成につれて後続的に形成される下位特性であると考えられる。とすれば、タイプA行動がまだ固定していない子どもの中で比較的タイプA行動を表出しやすい者においては攻撃性はまだ十分に形成されていない可能性も考えられる。したがって、成人のタイプA行動の下位特性をそのまま子どもに適用してしまう前に、それが子どもの実際のタイプA行動の表出にどのように関連しているのかを解明する必要があると言えよう。すなわち、成人のタイプA行動の下位特性のうち、子どものタイプA行動の表出を実際に規定している特性を同定することが必要であるし、あるいは、2つ以上の特性が関連しあって子どものタイプA行動を規定しているならばその関連の仕方を解明することが、タイプA行動パターンを形成する心理学的メカニズムの解明の端緒をひらくと考えられる。しかしながら、子どもを対象に下位特性自体を直接取り扱うような実証的研究はこれまで試みられていない(Whalen, Henker, Hin-

shaw & Granger, 1989)。

本研究では、成人のタイプA行動の主要な下位特性である競争性と焦燥—攻撃性の2特性がどのように子どものタイプA行動の表出を規定するかを、次の考えられる機械的組合わせによる4つのモデルのもとに検討することを第1目的とする。

下位特性モデル1 子どものタイプA行動は、競争性と焦燥—攻撃性両方の効果によってのみ表出する。そのどちらかが欠けるとタイプA行動は表出しない。

下位特性モデル2 子どものタイプA行動は、競争性の効果によって表出する。焦燥—攻撃性は、子どものタイプA行動の表出に関与しない。

下位特性モデル3 子どものタイプA行動は、焦燥—攻撃性の効果によって表出する。競争性は、子どものタイプA行動の表出に関与しない。

下位特性モデル4 子どものタイプA行動は、競争性か焦燥—攻撃性どちらかの効果によって表出する。その際もう一方の特性が関与する必要はない。

さて、タイプA行動パターンの表出の条件には、個人の特性と状況の相互作用のあり方が含まれる可能性があるという指摘されており、以前から状況変数の研究が重要視されてきた(橋本, 1980; Matthews, 1982)。状況は主として脅威的状况・非脅威的状况という枠組みで捉えられている。Feather & Volkmer (1988)によれば、伝統的アプローチは、タイプA行動パターンを脅威的状况に対する反応スタイルであると仮定してきた。すなわち、非脅威的状况においてはタイプA者と非タイプA者の行動表出に差は見られないと考えられてきた。したがって、面接によるタイプA評定は、脅威的状况を設定した上で実施された。ところが、後になって、タイプA者は状況に左右されず常に一定のタイプA行動を示すが、非タイプA者は状況によって行動を加減し脅威的状况下ではタイプA者と同様のタイプA的行動を示すため、行動表出のタイプ差が顕著に見られるのはむしろ非脅威的状况のときであるということが指摘されるようになった(Burnam, Pennebaker, & Glass, 1975; Manuck & Garland, 1979; 橋本, 1988)。しかしながら、子どもを対象にした研究では、どの状況下でもタイプA者は一貫して非タイプA者を上回るタイプA行動を示すが、その行動表出は両者とも一律に脅威的状况下で増大することが指摘されている(Corrigan & Moskowitz, 1983; Wolf, Sklov, Wenzl, Hunter, & Berenson, 1982)。このように、状況変数はタイプA行動の表出に影響を与えると考えられながら、その関係についてはいまだ統一した見解が得られていない。

本研究の第2の目的は、子どものタイプA行動と状況との関連の検討である。これに関して次の4モデルをめぐって検討する。

状況モデル1 タイプA者は、脅威的状況下でのみタイプA行動を示す。非タイプA者は、状況にかかわらず常にタイプA的行動を示さない。(FIG. 1)

状況モデル2 タイプA者は、状況にかかわらず常にタイプA行動を示す。非タイプA者は、脅威的状況下でのみタイプA的行動を示す。(FIG. 2)

状況モデル3 状況にかかわらず、タイプA者のタイプA行動の表出は常に非タイプA者のそれを上まわる。その一方で、タイプA者も非タイプA者とともに、脅威的状況下でタイプA行動を増大する。(FIG. 3)

状況モデル4 タイプA者は、状況にかかわらず常にタイプA行動を示す。非タイプA者は、状況にかかわらず常にタイプA的行動を示さない。(FIG. 4)

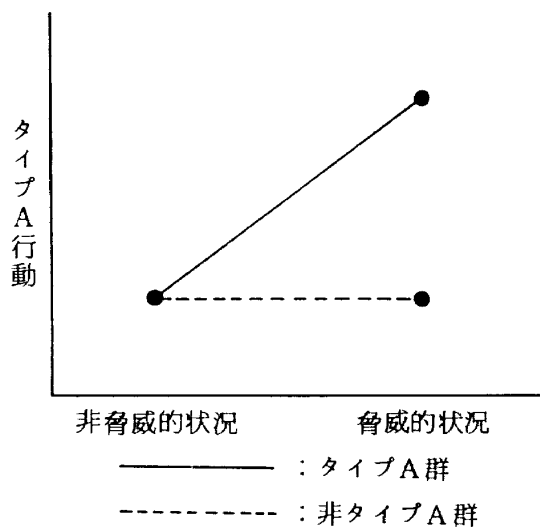


FIG. 1 状況モデル1

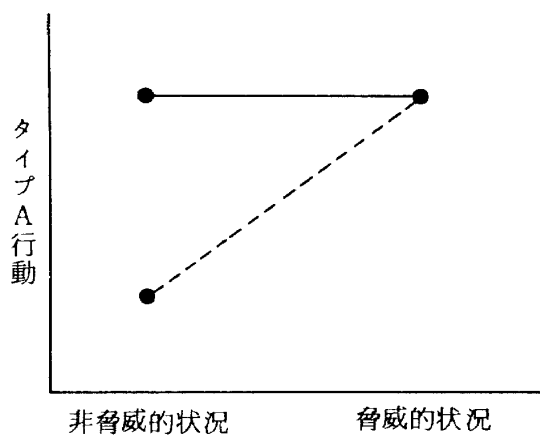


FIG. 2 状況モデル2

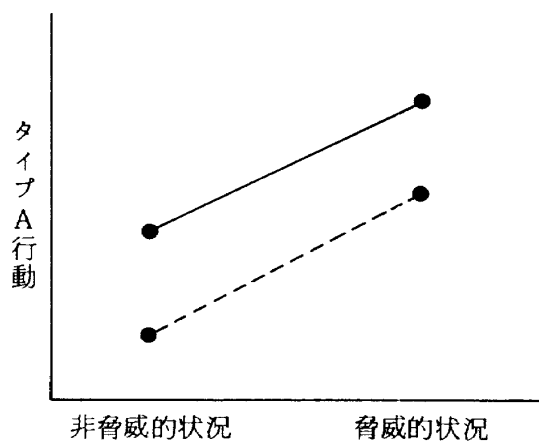


FIG. 3 状況モデル3

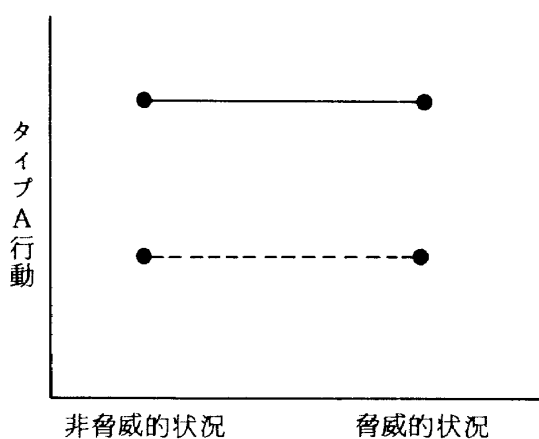


FIG. 4 状況モデル4

方法

デザイン 4 (2下位特性の組合わせによる被験者タイプ; Hh, Hl, Lh, Ll) × 4 (状況; 気楽, 無教示, 競争, 時間切迫) の被験者間2要因配置による実験を行った。競争性×焦燥-攻撃性×状況の3要因計画にしなかったのは、下位特性モデル1と4の違いを検出するなど4下位特性群間の差を細かく検討する目的のためである。

被験者 被験者は、小学校3年生男子64名、女子64名、4年生男子64名、女子64名の計256名である。あらかじめ、3-4年生計432名のMYTH日本語版(菊野・山崎, 1988)の評定を、担任教師の評定により実施した。MYTH日本語版は、幼稚園向けの単語(園でのおけいこ)を小学校生活に対応する単語(学校での活動)に修正したうえで用いた。

MYTHの全17項目について、主因子解バリマックス回転を行ったところ、菊野・山崎(1988)とほぼ同様の結果が得られたため、MYTHの各項目を競争性、焦燥-攻撃性の2下位尺度に分類した。尺度得点間の相

関は認められなかった($r=.026$)。さらに、競争性尺度得点、焦燥一攻撃性尺度得点、およびその合計得点(すなわちMYTH得点)について、その性差および学年差を調べる目的で2要因の分散分析を行った。その結果、焦燥一攻撃性尺度得点およびMYTH得点に有意な性差が得られた(競争性尺度得点: $F(1,428)=2.29$, 焦燥一攻撃性尺度得点: $F(1,428)=57.06$, $p<.0001$, MYTH得点: $F(1,428)=10.82$, $p<.001$)。学年差は有意でなかった(競争性尺度得点: $F(1,428)=2.29$, 焦燥一攻撃性尺度得点: $F(1,428)=1.82$, MYTH得点: $F(1,428)<1$)。性差と学年差の交互作用は得られなかった。(競争性尺度得点: $F(1,428)=1.67$, 焦燥一攻撃性尺度得点: $F(1,428)<1$, MYTH得点: $F(1,428)=1.12$)。

被験者の選定にあたって、各下位尺度得点は担任教師間の評定のバイアスを考慮して標準化した。その際、得点における性差も考慮し、男女別・学級別に各下位尺度得点の平均および標準偏差を算出し、それに基づいて、各下位尺度得点が平均より1標準偏差以上の者、1標準偏差以下の者をそれぞれ高群、低群に分類した。そして、競争性(高群・低群)×焦燥一攻撃性(高群・低群)の組み合わせにより4下位特性タイプの被験者(Hh, H1, Lh, L1; H, hは高群, L, lは低群を示す。大文字は競争性, 小文字は焦燥一攻撃性を示す。)を選出した。各群の競争性・焦燥一攻撃性の素点の得点範囲および平均値はそれぞれ以下の通りである。Hh群: 男子, 28—44 ($M=34.3$)・24—40 (32.0), 女子, 24—45 (34.4)・14—37 (25.5), H1群: 男子, 23—41 (33.0)・11—27 (17.5), 女子, 28—44 (35.2)・8—18 (13.0), Lh群: 男子, 10—27 (18.9)・17—40 (29.0), 女子, 10—32 (20.5)・16—40 (22.7), L1群: 男子, 9—27 (15.8)・8—23 (15.1), 女子, 9—24 (16.6)・8—19 (12.2)

独立変数 独立変数は、被験者の下位特性タイプと状況である。状況は、脅威的状況として、競争状況と時間切迫状況の2状況を、非脅威的状況として、無教示状況と気楽状況の、計4状況設定した。状況の操作は教示によって行った。教示は次の通りである。

競争状況; 競争的な状況であることを強調した。具体的な教示は、「このテストは点数は高ければ高いほど勝ちです。」

時間切迫状況; 時間制限を示すことによって時間に追い立てられた状況であることを強調した。なお、制限時間は実際には2分30秒であったが、短い時間であることを強調する目的はそこなわれないと考えて、より単純に3分と告げた。「制限時間は3分です。3分たったら途中で止めてもらいます。」

無教示状況; 教示による状況の操作を行わなかった。

気楽状況; 気楽にやってよいことを強調した。「これは平均を見るだけで、一人一人の点数は調べないので、楽な気持ちでしてください。また、時間も関係ありません。」

従属変数 従属変数はタイプA行動である。これまでの研究では、タイプAの指標をめぐって大きくわけて2通りの考え方がある。すなわち、下位特性である競争性、攻撃性、時間切迫性などをそれぞれ個別に調べたうえで総合的に評定しようとする考え方(Matthews & Anglo, 1980)と、一定時間内の実験課題の遂行量を指標としてタイプA行動の中心的な概念である奮闘を評定しようとする考え方である。たとえば橋本(1986)は、「より少ない時間でより多くのことを常に実現しようとする強い行動傾向こそType Aの核的成分」であると述べている。本研究では下位特性のなかにタイプA行動を規定する特性とその他の表出形態としての特性が混在している可能性を前提としているため、前者の方法はとらず、タイプAの中心的要素とされる奮闘に焦点を当てた。そして、その指標としては、従来の研究にならって一定時間内における課題の遂行量を採用した。課題は、Matthews & Brunson (1979)や橋本(1988)がタイプA行動の指標として用いた、Stroopの干渉課題を用いた。これは、赤・青・茶・緑・黒の5色のインクを用いて、それぞれの色の名前をその色とは異なる色のインクで記した文字を、ノートの見開きの左ページに問題刺激として1字、右ページに選択肢として5字配置し、問題刺激のインクの色と同じインクで書かれた色の名前を右ページの見開きの中から選ぶ課題である。遂行量が多いほどよりタイプA的であるとみなされる。奮闘の度合を調べるのが目的であるため、正答・誤答は問わなかった。

手続 実験は、学年別に、Hh, H1, Lh, L1の各下位特性タイプそれぞれ4名ずつ(男女各2名ずつ)計16名によって構成された小グループ単位で実施した。

16名の被験者がそろった時点で、実験者はまず、被験者集団がくじによる無作為抽出であること、課題が成績や運動能力には関係ないことを説明したうえで、解答の仕方を説明した。その後、一人一人が2回続けて正答できるまで個別に課題の理解を確認した。次に、状況を操作するための教示を2回くり返した。実験者が「はじめてください」と言う前から2分30秒経過した時点で解答用紙を回収した。時間切迫状況以外の状況では、実験者は被験者に見えないように時間を計った。実験全体の所要時間は、各グループ約15分であった。

TABLE 1 遂行量の平均と標準偏差 (男子)

	気楽状況	無教示状況	競争状況	時間切迫状況
Hh	15.50 (7.80)	19.13 (7.32)	19.88 (7.90)	25.63 (9.74)
H1	21.00 (11.48)	21.25 (5.37)	21.63 (7.11)	25.88 (9.00)
Lh	13.38 (6.89)	12.13 (4.26)	12.88 (6.22)	15.88 (7.77)
L1	14.63 (4.31)	16.50 (7.58)	11.50 (6.33)	16.25 (8.62)

() 内はSD

TABLE 2 遂行量の平均と標準偏差 (女子)

	気楽状況	無教示状況	競争状況	時間切迫状況
Hh	16.00 (7.31)	19.75 (5.06)	23.88 (8.32)	20.88 (10.11)
H1	18.88 (4.52)	21.38 (5.68)	22.13 (10.23)	27.75 (11.27)
Lh	12.75 (3.85)	12.00 (6.21)	20.25 (7.61)	17.75 (7.61)
L1	11.75 (5.92)	18.63 (5.48)	11.63 (7.71)	20.25 (6.78)

結 果

下位特性および状況の効果 MYTH 得点に性差が見られたため、得点分布の異なる男子と女子を等質のグループと見なすことの問題を考慮し、分析は男女別別に行った。2要因分散分析の結果、男女とも、被験者別の下位特性タイプの主効果 (男子; $F(3,124)=10.00, p<.01$, 女子; $F(3,124)=6.91, p<.01$) および状況の主効果 (男子; $F(3,124)=2.69, p<.05$, 女子; $F(3,124)=4.80, p<.01$) が有意であった。交互作用は得られなかった(男子; $F(9,127)<1$, 女子; $F(9,127)=1.37$)。下位特性タイプに関しては、LSD法による多重比較を行った結果、男女とも Hh・H1 群と Lh・L1 群との間に有意差 (Hh, H1>Lh, L1) があった (男子; $MSe=57.498$, 女子; $MSe=54.657, p<.05$)。つまり、競争性の高群と低群の平均の差が有意であった。したがって下位特性モデル2が採択された。

状況に関しては、男女とも、気楽状況、無教示状況、競争状況、時間切迫状況の順に遂行量が増大した。LSD法による多重比較を行った結果、男子では気楽状

況、無教示状況対時間切迫状況に有意差があった。女子では、気楽状況対競争状況、時間切迫状況、および、気楽状況、無教示状況対時間切迫状況にそれぞれ有意差が認められた。(男子; $MSe=57.498$, 女子; $MSe=54.657, p<.05$)。状況の主効果が認められ、なおかつ下位特性タイプとの交互作用がないため、この結果はほぼ状況モデル3に対応する。

考 察

下位特性に関しては、男女とも競争性の高群 (Hh, H1) が低群 (Lh, L1) に比べて有意に課題遂行量が多かったことから、下位特性モデル2が支持された。すなわち、子どものタイプA行動が主として競争性に規定されて表出されることが示された。

本研究が、個別実験ではなく集団実験であったため、状況的に競争性の高い被験者の競争性を高めたのではないかという問題点もある。しかしながら、本研究に先立って行われた予備実験で、小学生は学校生活において個別行動よりも集団行動に慣れているため、個別的に実験を行うとそれだけで非常に脅威的な状況設定になってしまうことが観察された。そのため、状況変数がタイプA行動パターンの表出に未だ体系づけられていない以上、より普段の生活形態に近い状況で実験を行うことに決定した。したがって、本研究の結果は、集団の状況に限っての結果として解釈する必要がある。

Price(1983)は、タイプA行動の研究において攻撃性 (aggression) という概念が以前から混乱してきたことを挙げ、それは、攻撃性という言葉が概念的に多様な定義を含んでいることと関係があると指摘したうえで、“この言葉はもっともしばしば敵意・競争性に関連して用いられている。”と述べる。言うなれば、激しく競争性が高められたり敵意が高められたときに、人はしばしばその結果として攻撃的になると考えられる。とすれば、タイプA行動の研究の上では、タイプA者の攻撃性を、競争性とは別の起源を持つ性格特性と捉えるよりは、競争性のもとに出現・形成される特性と捉えたほうが適切であろう。今後は、競争性が高く攻撃性の低い群(本研究で言えばH1群)に注目して、その攻撃性が、激しい奮闘努力の際に高められることがあるかどうか確認することが必要である。さらには、その群を長期的に追跡して、攻撃性の低さは固定的なものなのかそれとも激しい奮闘努力をくり返すうちに攻撃性が形成されていくのか、攻撃性が形成されていくとすればそこにはどのような要因が働いているのかなど解明することが望まれる。

さて、状況に関しては、おおむね非脅威的状況に比べて脅威的状況下でタイプA行動の表出が有意に増加した。さらに、下位特性との交互作用が得られなかったため、状況モデル3が採択された。すなわち、どの状況下でも、タイプA者のタイプA行動の表出が常に非タイプA者のそれを上まわすが、一方で、タイプA者も非タイプA者もともに、脅威的状況下でタイプA行動の表出を増加することが確認された。この結果は、子どもを対象としたこれまでの先行研究の結果とほぼ一致している。

ただし、結果をさらに詳細に検討すると、非脅威的状況として設定した2状況のうちの無教示状況と、脅威的状況—とりわけ競争状況—との間に、必ずしも遂行量の目立った差があるわけではない。この理由としては、一方で、無教示状況が状況としてはあいまいで、子どもたちは必ずしもこれを非脅威的な状況としては認識しなかった可能性が挙げられる。また一方で、競争状況は、教示によって勝敗を強調したため、単なる脅威とは異なる別の心理的要因、すなわち、勝ち負けに対して子供たちがもっている心的かままとでもいふべきものが働いたのではないかと考えられる。これに関して特筆すべきは、L1群が、男女とも競争状況において遂行量の落ち込みを示していることである。競争性も攻撃性もともに低い子どもは全般的な活動性も低く、そのため競争場面では敗者に甘んじがちであろうと推測される。そのような日常の積み重ねによって、競争場面ではかえって奮闘をはじめから投げ出してしまうような心的かまかが形成され、それが競争状況において反映されたと考えられまいだろうか。以上はあくまでも実験場面を観察した際の推測であるが、このことを的確に捉えるために、被験児が状況をどのように把握しているかをチェックするための別の指標を組織的に取るべきであったと反省される。しかしながら、以上述べた微妙なばらつきは統計的結果に影響をもたらすものでなく、また、気楽状況と時間切迫状況の間には一貫して遂行量の差が認められるため、全般的には状況モデル3が支持される。ただし、今後はサンプル数を増やしたうえでさらに検討を重ねる必要がある。

今後は、タイプA行動の指標をさらに工夫することが課題のひとつである。奮闘を課題の遂行量によって捉える従来の方法には、より精密には認知能力のコントロールの問題が残るのではないかと、実験を行いながら疑念を持った。たとえば、本研究ではタイプA行動の中心的概念である奮闘の指標として正答・誤答を問わず課題の全遂行量を用いたが、より精密には、誤

答数と正答数の組み合わせにより、処理能力の高い者とやみくもに奮闘している者とを精密に判別していく工夫が必要であると考えられる。さらには、ビデオなどを用いて、課題遂行量のみでは測りきれない遂行のプロセスを評定したり、また、爆発的な話し方やいちどに2つ以上のことをしようとする傾向などより慢性的で持続的な奮闘の行動上の兆候とされているものも考慮に入れて多面的に検討することが必要であろう。

最後に、本研究では、被験者を選定する目的で用いた質問紙 MYTH の結果に性差が見られたため、男女別々に分析を行った。しかしながら、たとえば、男子の高群と女子の高群は、尺度上たしかに等質とは見なしがたいが、一方で、それぞれが一般的な範囲において男子における高得点群および女子における高得点群であることもたしかである。そこで、補足的に、独立変数として下位特性および状況の要因に性要因を加えて分散分析を行ったところ、性要因の主効果および他要因との交互作用は得られなかった。すなわち、本研究の結果からは、実際のタイプA行動の表出において、下位特性や状況の効果に比べると性差の効果は少ないのではないかとこの考察が得られた。ちなみに、MYTH 以外の子どものタイプA行動の評定法では、性差は認められていない (Kirmil-Gray, Eagleston, Thoresen, Heft, Arnow, & Brche, 1987)。これは、1つには、MYTH の第17項目の「喧嘩ばやい」などの質問項目では女子の攻撃性が測定しにくいためであるとも考えられる。そして、その背景として、そもそもタイプA行動という概念が、男性のみを対象とした研究 (Friedman, & Rosenman, 1959) の中から発想されたものであるということが挙げられる。つまり、当初得られたタイプA行動パターンの臨床像は、主として男性のタイプA者の臨床像であり、これに対して女性のタイプA者の臨床像は男性とは若干異なるものである可能性も考えられる。この問題の解明は今後の課題であるが、たとえ行動パターンとして観察される臨床像に性差があったとしても、少なくとも本研究の指標により示される範囲において、より少ない時間でより多くのことを常に実現しようとするような核となる行動傾向には性差がない可能性が示唆された。

引用文献

- Bergman, L.R., & Magnusson, D. 1986 Type A behavior : A longitudinal study from childhood to adulthood. *Psychosomatic Medicine*, 48, 134—142.

- Burnam, M.A., Pennebaker, J.W., & Glass, D.C. 1975 Time consciousness, achievement striving and the Type A coronary-prone behavior pattern. *Journal of Abnormal Psychology*, **84** (1), 76—79.
- Corrigan, S.A., & Moskowitz, D.S. 1983 Type A behavior in preschool children : construct validation evidence for the MYTH. *Child Development*, **54**, 1513—1521.
- Feather, N.T., & Volkmer, R.E. 1988 Preference for situations involving effort, time pressure, and feedback in relation to Type A behavior, locus of control, and test anxiety. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**—2, 266—271.
- Friedman, M., & Rosenman, R.H. 1959 Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings. *Journal of the American Medical Association*, **169**, 1286—1296.
- Friedman, M., & Rosenman, R.H. 1974 Type A behavior and your heart. New York : Knopf.
- 橋本 幸 1980 Type A行動をめぐる最近の諸問題—ストレス・不安との関連— 心理学評論, **23**—3, 322—332.
- 橋本 幸 1986 Type A者の達成努力と心臓血管反応に関する実験的研究 人文学, **142**, 30—41.
- 橋本 幸 1988 Type A者の競争性に関する実験的研究 人文学, **145**, 1—15.
- 菊野春雄・山崎勝之 1988 日本語 MYTH 検査の作成(1) —項目作成とデータ特性について— 日本教育心理学会発表論文集, 474—475.
- Kirmil-Gray, K., Eagleston, J.R., Thoresen, C.E., Heft, L, Arnow, B., & Bracke, P. 1987 Developing measures of Type A behavior in children and adolescents. *Journal of Human Stress*, **5**—15.
- Lundberg, U. 1983 Note on Type A behavior and cardiovascular responses to challenge in 3—6 year old children. *Journal of Psychosomatic Research*, **27**, 39—42.
- Manuck, S.B., & Garland, F.N. 1979 Coronary-prone behavior pattern, task incentive, and cardiovascular response. *Psychophysiology*, **16**, 136—142.
- Matthews, K.A. 1981 “At a relatively early age ……the habit of working the machine to its maximum capacity” : Antecedents of the Type A coronary-prone behavior pattern. In Brehm, S., Kassin, S.M., & Gibbons, F.X (Eds.) *Developmental social Psychology*, Oxford University Press, 235—248.
- Matthews, K.A. 1982 Psychological perspectives on the Type A behavior pattern. *Psychological Bulletin*, **91**, 293—323.
- Matthews, K.A., & Anglo, J. 1980 Measurement of the Type A behavior pattern in children : Assessment of children’s competitiveness, impatience-anger, and aggression. *Child Development*, **51**, 466—475.
- Matthews, K.A., & Avis, N.E. 1983 Stability of overt Type A behaviors in children : Results from a one-year longitudinal study. *Child Development*, **54**, 1507—1512.
- Matthews, K.A., & Brunson, B.I. 1977 Allocation of attention and the Type A coronary-prone behavior pattern. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 2081—2090.
- 大枝泰彰・保坂隆・田川隆介・杉田稔・日野原茂雄・五島雄一郎 1984 A型行動パターンと虚血性心疾患—他の coronary risk factor との関係— 心身医学, **24**, 125—132.
- Price, V.A. 1982 What is Type A ? A cognitive social learning model. *Journal of Occupational Behavior*, **3**, 109—129.
- Price, V.A. 1983 The Type A behavior pattern : a cognitive social learning model. Academic Press, New York.
- Steinberg, L. 1986 Stability (and instability) of Type A behavior from childhood to young adulthood. *Developmental Psychology*, **22**, 393—402.
- Strube, M.J. 1987 A self-appraisal model of the Type A behavior pattern. In Hogan, R., & Jones, W.H. (Eds.), *Perspectives in personality : Theory, measurement and interpersonal dynamics*. Greenwich, CT : JAI Press, 201—250.
- Vega-Lahr, N., & Field, T.M. 1986 Type A behavior in preschool children. *Child Develop-*

- ment, *57*, 1333—1348.
- Whalen, C.K., Henker, B., Hinshaw, S.P., & Granger, D.A. 1989 Externalizing behavior disorders, situational generality, and the Type A behavior pattern. *Child Development*, *60*, 1453—1462.
- Weidner, G., McLellarn, R., Sexton, G., Istvan, J. & Connor, S. 1986 Type A behavior and physiologic coronary risk factors in children of the family heart study : Results from a 1-year follow-up. *Psychosomatic Medicine*, *48*, 480—488.
- Wolf, T.M., Sklof, M.C., Wenzl, P.A., Hunter, S.M., & Berenson, G.S. 1982 Validation of a measure of Type A behavior pattern in children : Bogalusa heart study. *Child Development*, *53*, 126—135.
- 山崎勝之・菊野春雄 1990 日本語版幼児用 Type A 検査 (MYTH) の作成 心理学研究, *61*, 155—161.

謝 辞

研究にご協力下さいました小学校の教職員・児童の皆様へ感謝致します。本稿を作成するにあたりお茶の水女子大学の無藤隆助教授及び指導教官の飯長喜一郎助教授に貴重な助言を頂きました。心よりお礼申し上げます。

(1992年2月13日受稿)